

悠久の河

6

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

祖父との別れ

「神さまの山だと言われとる剣山を削り取るなんて、普請の時から嫌な予感がしとった」

村人たちは、ここ二年程の幸せだった日々のことばかりが心に浮かび、その前が、どんなに酷い状態だったのかさえ、思い出す余裕が無かった。

家正の川普請が竜神さまの怒りを買ったという噂が、まことしやかに村中に広まったのは、このころからだった。

「川幅をもっと広げたら、災害はきつと防げる。みんなで力を合わせんか、このままでは、昔と同じことになってしまうぞ」

そう叫ぶ家正の声に耳を傾け、手を貸そうとする者はいなかった。

さらに、松江藩に願い出た災害復旧工事の返答も無いまま、月日は過ぎて行った。

家正は、家に籠ることが多くなり、床に臥せる日も多くなったが孫の彌兵衛にだけは、気分の良い時に学問を教え、いろいろな話を聞かせた。

「よいか、彌兵衛、そなたの父の宗因は、体が弱いゆえ、庄屋の大役は務まるまい。いずれ、おまえが庄屋となる日が来る」

「いやだ、おれは庄屋になんかなるものか。おじいさまが、あんなに懸命に村のことを考えても村の人は、おじいさまに顔をそむけて通るではありませんか」



画 高田勲

「いいか彌兵衛、人の上に立つ者はな、今だけを見てはいけない。何年も先を見通す目を持つことだ。そのためには、いろいろなことをしっかりと学ばんといかん。村の人も、きつと解ってくれる日が来る。わしが無駄なことをしたのでは無いということがな。最初の一步が有るか。次的一步が有る。今、すぐに解つてもらおうと思うなよ。のう、彌兵衛、子の代で、孫の代で、ここに住んでいて良かったと思つてもらえる村を作らなくてはいいかん。解るか、彌兵衛」

「ちっとも、わからん」

「そうか、アハハハ、わからんか」

家正は笑った。

「おじいさまの悪口を言う村のやつらなんか大嫌いだ。おじいさまを助けようとしなない村のやつらも大嫌いだ」

「おう、おう。わしをかばってくれる者がいて、わしも幸せ者よのお。ハッハッハ」

明暦三年（一六五七年）二月、災害から三年目の早春、家正は復旧工事の許可が藩から下りないまま、失意の一生を終えた。彌兵衛、六歳の年であった。

家正が世を去ってから、九年後には、藩主の松平直政が世を去った。

日吉村の人々は再び、雨期になる度に水害に怯えて暮らす生活を強いられていた。田畑は水害の度に荒れ果て、復旧作業の終わらぬ間に、また次の水害が襲った。